

氏名	大野 弘恵		
学位の種類	博士(経営学)		
学位記番号	甲第 20 号		
学位授与年月日	2013 年 9 月 12 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当(課程博士)		
学位論文題目	助産活動の多様な展開とその活性化に関する研究 — 「助産師」の役割と課題の考察にもとづいて —		
論文審査委員	委員	教授	小林 甲一
	委員	教授	秋元 浩一
	委員	教授	笠井 雅直
	委員	教授	皆川 芳輝

審査結果の要旨

1. 本論文の趣旨

本論文は、総合病院の産婦人科、産科クリニック、母子保健センターおよび開業助産所など多様な場において展開される助産活動（出産の介助—出産を取り扱うこと）を研究対象とし、医師との協働による助産活動の担い手である「助産師」に着目し、その資格と活動主体を1つの経営体として捉えたうえで、助産師とその助産活動を取りまく母子保健、医療提供体制および周産期医療の歴史や現状を概観し、さらに助産師教育における諸問題、助産活動をめぐる経営形態の動き、および助産師主導による新たな取組について考察し、助産活動の活性化に向けた課題を明らかにするとともにその将来方向を展望したものである。

なかでは、助産師資格をもつ担い手がどのような経営理念をもち、それを継承・発展・転換させながら、いかにしてその助産活動を活性化させるかという視点から、この特別な資格のユニークな歴史、戦後の産科医療から周産期医療への変遷における助産活動の諸変化、および助産師の職能育成の大切さが明らかにされ、また、「院内助産システム」の新たな取組みや諸外国の事例にも検討が加えられている。とりわけ、丁寧なヒアリング調査をもとに、長期的な減少傾向にある助産所の経営形態とその構造転換について考察し、そこに「助産師主導による助産活動の活性化」に向けた光明を見いだそうとする点は注目に値する。

2. 本論文の構成と各章の概要

本論文は、研究の背景および目的、論文の構成について説明した「序章」、「第1章～第6章」、および研究成果の要約および今後の課題についてまとめた「終章」からなるが、本論である第1章から第6章までの6つの章は2つの部分によって構成されている。

前半の第1章～第3章は、本論文の研究対象である助産師を取りまく背景ならびに諸条件を明らかにした部分であり、なかでは、保健医療や母子保健の変遷、医療提供体制の展開との関わりにおける産科医療から周産期医療への転換ならびに今日の周産期医療体制の現状と課題について論じられている。また、後半の第4章から第6章では、本論文の主題である、1つの経営体としての「助産師」に焦点をあて、その活動の活性化に向けて重要だと考えられる3つの分野、つまり①資格取得に向けた助産師教育と卒後の職能育成、②助産活動の原点である助産所の経営形態とその構造転換、および③「院内助産」を始めとした、助産師主導による助産活動の活性化のための取組について詳しく論じられている。そして、こうした本論を構成する各章の概要は以下のとおりである。

【第1章 日本における母子保健の変遷と助産師の活動】は、「産婆」から「助産婦」へ、そして「助産師」と名称を変えて生きてきたその資格の歴史を振り返り、保健医療や母子保健の発展のなかでその助産活動がどのように位置づけられ、展開してきたかを明らかにしたものである。なかでも、助産師や助産活動の展開から整理された母子保健の変遷に関する時代区分は、独創的であり、学術的価値の高いものである。【第2章 助産活動と医療提供体制の展開 — 産科医療から周産期医療へ —】は、医療提供体制が産科医療から周産期医療へと移行していく様子を的確に捉え、戦後の医学と母子保健対策のめざましい進歩との関わりで助産師の活動がどのように移り変わっていったかについて論じたものであり、また、なかでは産科医療をめぐるさまざまな問題にも触れられている。こうした文脈においては、特に、産科医師との関係性が鍵を握っており、助産師活動の困難さと可能性を看取することができる。【第3章 周産期医療体制の現状と今後の課題】は、第2章からの流れを受けて、今日の助産活動を取りまく環境および枠条件として重要な周産期医療体制の現状と課題について整理し、考察したものである。なかでは、まずその現状について概観したうえで、愛知県を事例に地域保健医療計画と周産期医療体制の整備について検討し、ヒアリング調査をもとに地域の政策医療の担い手として新たに創設された「社会医療法人」制度も取り上げている。

また、【第4章 助産師教育の変遷と職能育成】は、助産師の資格取得に向けた教育制度の変遷と資格取得後の職能育成や研修プログラムについて概観し、今後の課題や方向性を明らかにしたものである。専門性の高い、高度な資格であるだけに、ここに助産師を取りまく諸変化や今後のあるべき姿が凝縮されており、大変興味深い内容である。【第5章 助産所の経営形態と構造転換】は、助産師本来の活動がもっとも明確に現れる開業助産所（いわゆる助産院）の現状や課題をその経営形態への視点から捉え、そこから経

営主体としての助産師の主導による今後の展開方向を探ろうとしたものである。この部分は、計7か所の助産院に対するヒアリング調査に裏打ちされており、他に類のない研究業績である。【第6章 助産師主導による助産活動の活性化】は、第3章から第5章で触れた内容のまとめも含め、そこで取り上げることのできなかつた「院内助産システム」について詳しく紹介することで、助産師主導という方向による助産活動の活性化のあるべき姿について論じたものである。ここでは、助産活動のあり方やその活性化の取組について諸外国の事例についても考察されており、これらは、国際比較の視点からの政策提案にもなっている。

3. 本論文の評価

- 1) わが国の助産師は、看護師や保健師と比べ、「女性しか取得できない」という特殊性だけではなく「個人で開業できる」という特質をもっており、その活動主体に独自の経営理念や経営政策が求められる資格である。本論文は、この点を首尾一貫してしっかりと捉え、全体を通して母子保健、産科医療から周産期医療へ、周産期医療体制の整備、職能教育・育成および助産所の運営などにおいてその経営理念を明らかにし、それをもとに助産師主導による助産活動の活性化のあり方についていくつかの視点から論じており、この点がもっとも高く評価できる。
- 2) また、第1章において母子保健の時代区分にもとづいて助産師活動の発展を整理して論じた点、第2章において産科医療の変遷によって助産師活動のあり方が大きく変化した背景や要因を明らかにした点、第3章において新たな制度の社会医療法人による周産期医療の取組について考察した点、第5章において助産所の経営形態における新たな動きについて調査し、構造転換の方向を明らかにした点、および第6章において院内助産システムの新たな動きについて論じた点、などについても、新規的かつ独創的で、学術的価値の高いものとして評価できる。
- 3) さらに、長年、助産師ならびに助産師養成・母子看護学教育に従事してきた経験知のみならず、数多くのヒアリング調査による新たな知見や実践的研究の成果が、本論文の随所に生かされており、この点も、本論文の特色というだけではなくその価値を高めるものとして評価できる。

4. 論文及び研究能力に関する最終的評価

以上から、本論文は、研究テーマ、論文の構成や研究方法、論文内容のいずれにおいても総合性、新規性および独創性など十分な学術的価値を有しており、博士（経営学）に値するものであると判断できる。よって、その専門的研究能力の高さも含めて、本論文の提出者である大野弘恵氏に博士（経営学）を授与することを可とする。